貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第63集

沢城跡発掘調査概要

平成14年(2002) 6月30日
貝塚市教育委員会

1．はじめに

沢城跡は中世・戦国時代の城跡・集落跡である。貝塚市北西部の沢、浦田地区に所在し、遺跡の北はすぐ大阪湾となり、近木川と見出川に挟まれた中位段丘に立地する。調査地は南海電鉄二色の浜駅に近く、西側には大阪－和歌山を結ぶ紀州街道、府道堺阪南線があり、付近には住宅が密集する。

沢城は、「浜の古城」とも呼ばれ、天正13年（1585）の豊臣秀吉の根来攻めには、田中加足を大将として雑賀衆6千人が立て籠もった。城は中川秀政、高山右近らの軍勢に攻められたが、卜半斎了珍の仲介によって和談開城した。近木川流域には紀州根来勢によって畠中城、積善寺城、高井城、森城、千石堀城など多くの城が築かれており沢城もその1つである。沢城は街道の東西にわたって集落を取込んだ堀をめぐらしていたと考えられており、1981年度、1995年度の調査において堀状の遺構を検出している。

周辺の遺跡としては、東に弥生～室町時代の散布地・寺院跡である窪田遺跡・窪田廃寺、南には奈良～室町時代の集落跡である澱池遺跡、西には奈良時代～平安時代の散布地である沢海岸北遺跡、弥生～奈良時代・中世・近世の集落跡・散布地である沢遺跡、平安時代の寺院跡である明楽寺跡がある。明楽寺跡からは菩薩文軒丸瓦、

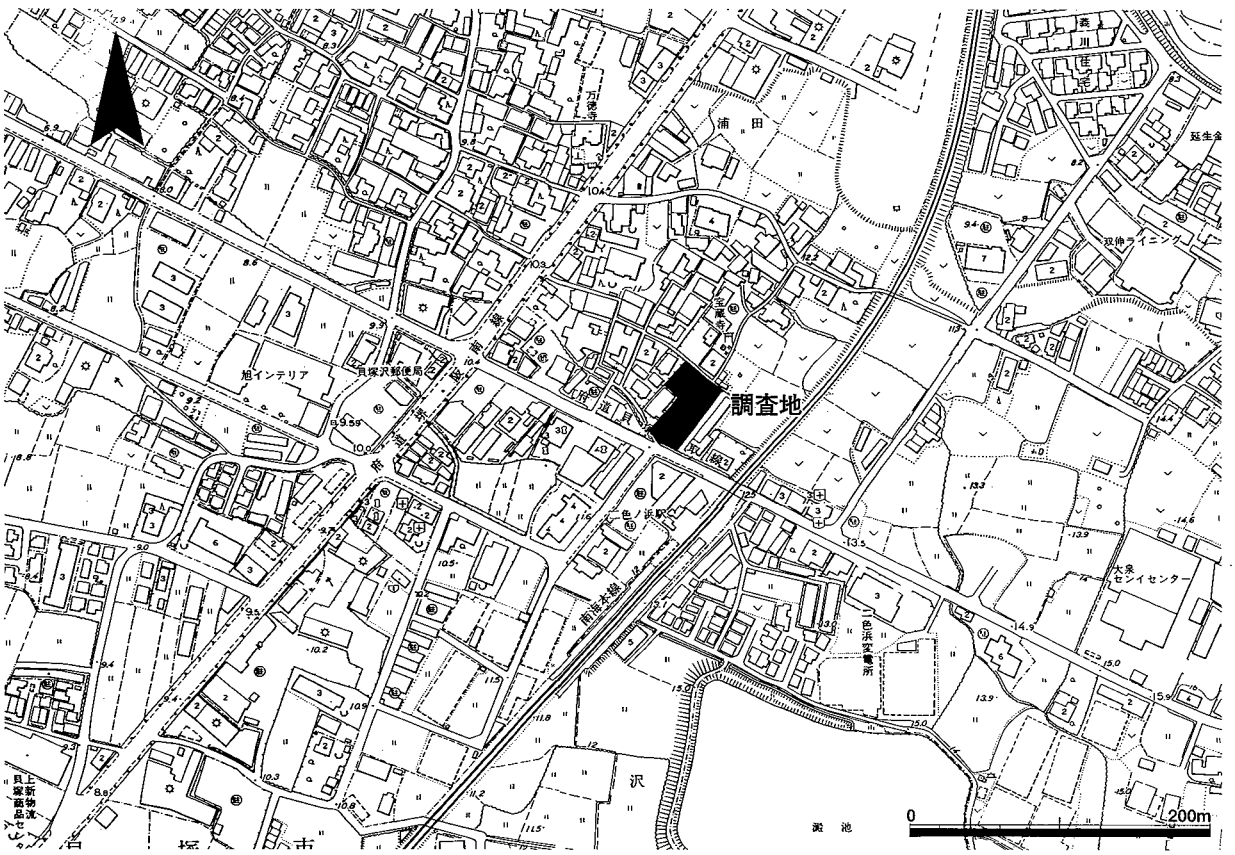


図1　調査地位置図　　（北方向は座標北）

梵字文軒丸瓦が出土している。最近の調査では中世・近世の耕作地跡を検出した。南西には、中世の集落跡である沢老ノ塚遺跡、沢西遺跡がある。北西には中世・近世の集落跡である沢新開遺跡、中世の集落跡である沢タナジリ遺跡、古墳～江戸時代の散布地である沢西出遺跡、古墳～室町時代の散布地である沢共同墓地遺跡がある。

以上のように周辺部には市内でも多くの遺跡が存在する地域である。そのため、遺跡にかかる発掘調査を多く実施している地域といえる。

本発掘調査は貝塚市浦田他地内における共同住宅建設工事にあたり実施したもので、平成12年12月13日に発掘届出書が提出された。調査計画に基づいて平成12年12月27日に確認調査を実施した。その後、設計変更がなされたため、再度発掘届出書をもとめ、平成13年10月10日に書類が提出された。確認調査は平成13年10月31日～11月１日に実施し、また建物解体後の平成14年1月23日～1月24日にかけて確認調査を実施した。協議の結果、建物建設によって遺構が破壊を受ける部分について発掘調査が必要となり、平成14年2月20日に覚書を交わし発掘調査は平成14年3月4日～3月29日にかけて実施した。

なお、内業調査については本書刊行をもって終了した。調査にあたっては、西出美津枝氏ならびに関係各位により多大な御理解と御協力を得た。ここに記して感謝の意を表します。

２．調査成果

今回の調査は大阪府貝塚市浦田117－3において、平成14年3月4日～3月29日まで実施した。

調査は開発により破壊される部分に調査区を設定したが、確認調査により判明していた撹乱部分を調査区から除外した結果、２カ所の調査区となった。北側調査区を第１区（212㎡）、南側調査区を第２区（60㎡）とし、合計272㎡の面積で実施した。調査区は調査面の幅が狭いため調査区の北東端から５ｍ間隔で区切り１～７区、西側からＡ区（第1区）、Ｂ区（第2区）として調査区画を設定した。

第１区

本調査区は長さ35m、最大幅7.5mで設定し、212㎡の調査を実施した。本調査区の地層状況は0.8mの現代盛土、0.1mの現代耕作土層、盛土と考えられる粘土ブロックを含む耕作土層0.1m、地山の黄色粘土層となる。この地層の状況は、農地の改変によって地山面が削平され、段下に盛土を行なうことで平坦面がつくられたことによると考えられる。当時存在していたと考えられる遺物包含層は削平されて存在しない状況である。また、検出遺構についても上面が削平された状況である。

検出遺構は溝５条、土坑３、鋤溝３を検出した。遺物は、瓦器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦が出土している。中でも瓦が多数出土している。以下、主な遺構、出土遺物について概要を示す。

SD－２００１

本遺構はＡ－5～７区にて検出した溝である。SD－2001、SD－2004、SD－2005は、３条が切り合う溝である。切り合い関係からSD－2001、SD－2004、SD－2005の順で掘削されたと考えられる。

溝の方向は北東－南西方向で検出長13.0m、幅2.05m、深さ0.55mで埋土は３層（１～３層）に分けられる。1層は黄褐色砂質土（2.5Y5／3）、2層は黄褐色砂質土（2.5Y5／3）で黄色粘土ブロックを含む。3層は暗灰黄色粘土である。2層の状況（埋土に地山粘土が多く含まれている状況）から地形改変以前に掘削された可能性があり、地形改変時に削平を受けて埋められていることが推測できる。掘削は地形変化点に沿って行われており、耕作に伴う溝と考えられる。溝内には、長さ約２ｍ、幅0.6mの範囲で瓦、陶磁器、礫が集積している部分（集積部）がある。（図４）

遺物は、瓦、瓦器、土師器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器が出土している。19世紀代の遺物は全く出土しておらず17世紀代～18世紀前半の遺物が多く出土している。

1層からは瓦、陶磁器が出土している。2層からは土師質焙烙（写真23）、青磁の牛人形（写真21）、緑青の付着する鋳造関係の遺物（写真22）などが出土している。3層からは瓦（写真26）、土師質焙烙（写真25）、すり

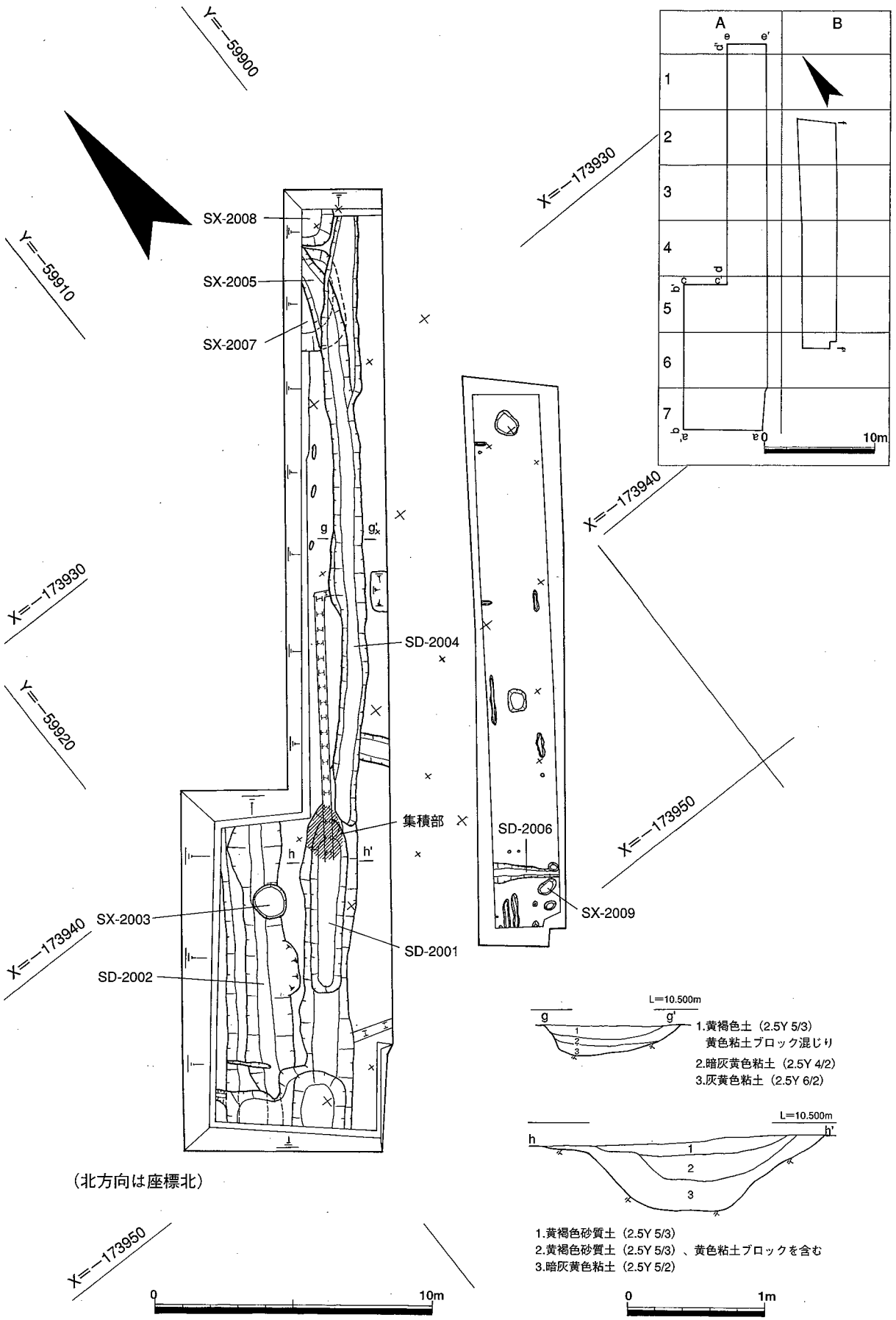
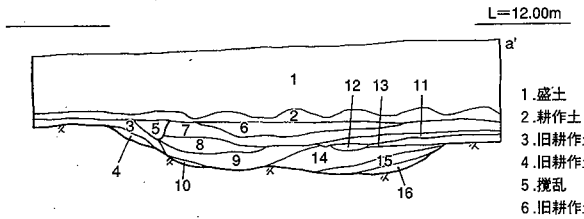
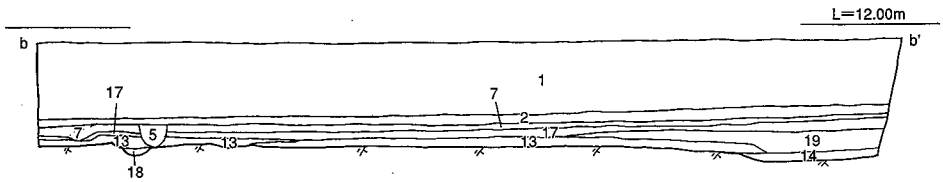

Y=−59900
Y=−59910
Y=−59920
X=−173930
X=−173940
X=−173950
SX-2008
SX-2005
SX-2007
SD-2004
集積部
SX-2003
SD-2002
SD-2001
SD-2006
SX-2009
A
B
1
2
3
4
5
6
7
10m
L=10.500m
1.黄褐色土（2.5Y 5/3）
黄色粘土ブロック混じり
2.暗灰黄色粘土（2.5Y 4/2）
3.灰黄色粘土（2.5Y 6/2）
1.黄褐色砂質土（2.5Y 5/3）
2.黄褐色砂質土（2.5Y 5/3）、黄色粘土ブロックを含む
3.暗灰黄色粘土（2.5Y 5/2）
（北方向は座標北）
0
10m
1m

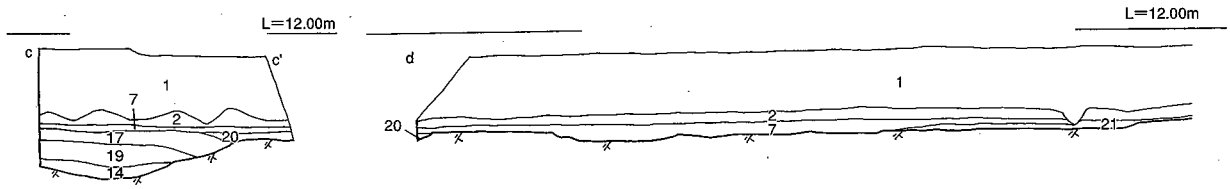
図２　遺構配置図



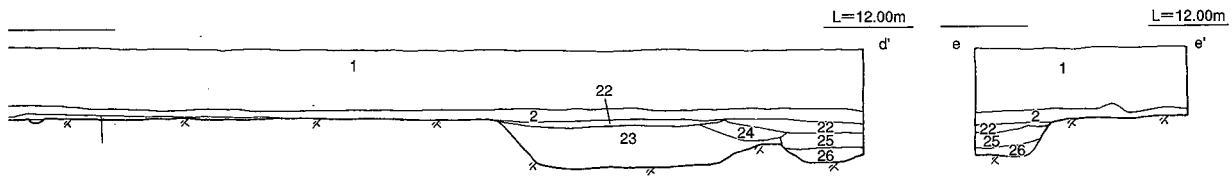
1.盛土
2.耕作土
3.旧耕作土：灰色砂質土（7.5Y6／1）
4.旧耕作土：灰色砂質土（7.5Y6／1）
5.攪乱
6.旧耕作土：灰色砂質土（7.5Y6／1）
7.灰オリーブ色砂質土（5Y5／2）
8.黄褐色砂質土（2.5Y5／3）
9.暗灰黄色粘土（2.5Y5／2）
10.暗灰黄色粗砂（2.5Y5／2）
11.黄褐色土（2.5Y5／3）
12.黄褐色土（2.5Y5／3）黄色粘土混じり
13.暗灰黄色砂質土（2.5Y4／2）
14.灰黄褐色礫砂（10YR5／2）（SD－2002　3層）
15.灰黄褐色礫砂（10YR5／2）、灰黄褐色粘土（10YR5／2）混じり
16.灰黄褐色粘土（10YR5／2）



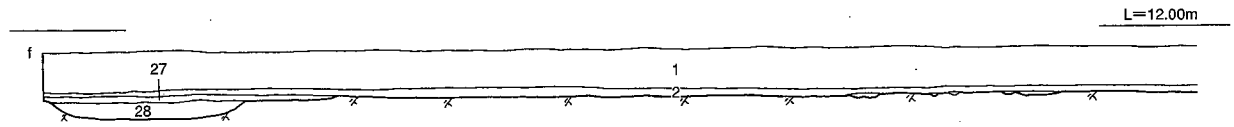
17.黄褐色土（2.5Y5／3）（SD－2002　1層）
18.灰黄褐色土（10YR6／2）
19.灰黄色土（2.5Y6／2）（SD－2002　2層）



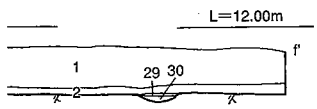
20.黄褐色土（2.5Y5／3）、灰オリーブ色砂質土（5Y5／2）混じり
21.旧耕作土



22.旧耕作土
23.耕作土、粘土ブロック混じり（SX－2007埋土）
24.耕作土（SD－2005埋土）
25.耕作土と黄色粘土ブロック混じり（SX－2008　1層）
26.瓦、陶磁器等（SX－2008　2層）



27.攪乱
28.攪乱（煉瓦、瓦を含む）
29.暗灰黄色土（2.5Y5／2）黄色粘土混じり（SD－2006　1層）
30.暗灰黄色土（2.5Y5／2）（SD－2006　2層）



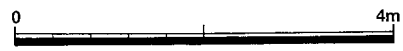


図３　土層断面図

鉢（写真24）が出土している。陶磁器（写真11）は肥前系磁器が多く、くらわんか手のものが中心に出土している。文様は雨降り文、雪輪草花文、コンニャク印判手碗が多い。陶器では京焼風陶器が出土しており、高台部に「清水」、「新」などの刻印がみられる。

また、集積部から、多くの瓦（図５、写真12）とともに「寛文十□」（1670～1673）銘の線刻瓦（図5、写真19）が出土した。出土瓦はすべて破片であり接合できるものはほとんどない状態であった。

ＳＤ－２００２

本遺構はＡ－5～７区にて検出した溝である。現在の土地区画と同一方向であり、地形変化部分を掘削しており、耕作に伴なう溝と考えられる。北東－南西方向で検出長10.7m、幅2.6m以上、深さ0.6mで埋土は3層（１層～３層）に分けられる。1層は黄褐色土（2.5Y5／3）、2層は灰黄色土（2.5Y6／2）、3層は灰黄褐色礫砂（10YR5／2）である。

遺物は13世紀～15世紀にかけてのものが出土している。１層から瓦器が少量出土している。2層は、瓦器椀（写真13）、土師器が多数出土している。3層からは瓦器椀（写真15）、瓦質羽釜（写真16）、銅銭3枚（治平元寶：写真17、洪武通寶：写真18、無文か？）が出土している。

ＳＤ－２００４

本遺構はＡ－１～５区にて検出した溝である。溝の方向は北東－南西方向で検出長21.8m、幅1m、深さ0.2mで埋土は３層（1層～3層）に分けられる。１層は黄色粘土ブロック混じりの黄褐色土（2.5Y5／3）である。耕作土を埋土としており、耕作に伴う溝として掘削された排水溝と考えられる。2層は暗灰黄色砂質土（2.5Y４／2）、3層は灰黄色粘土である。

遺物は、瓦、瓦器、土師器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器が出土している。出土遺物の時期は中世～近世で

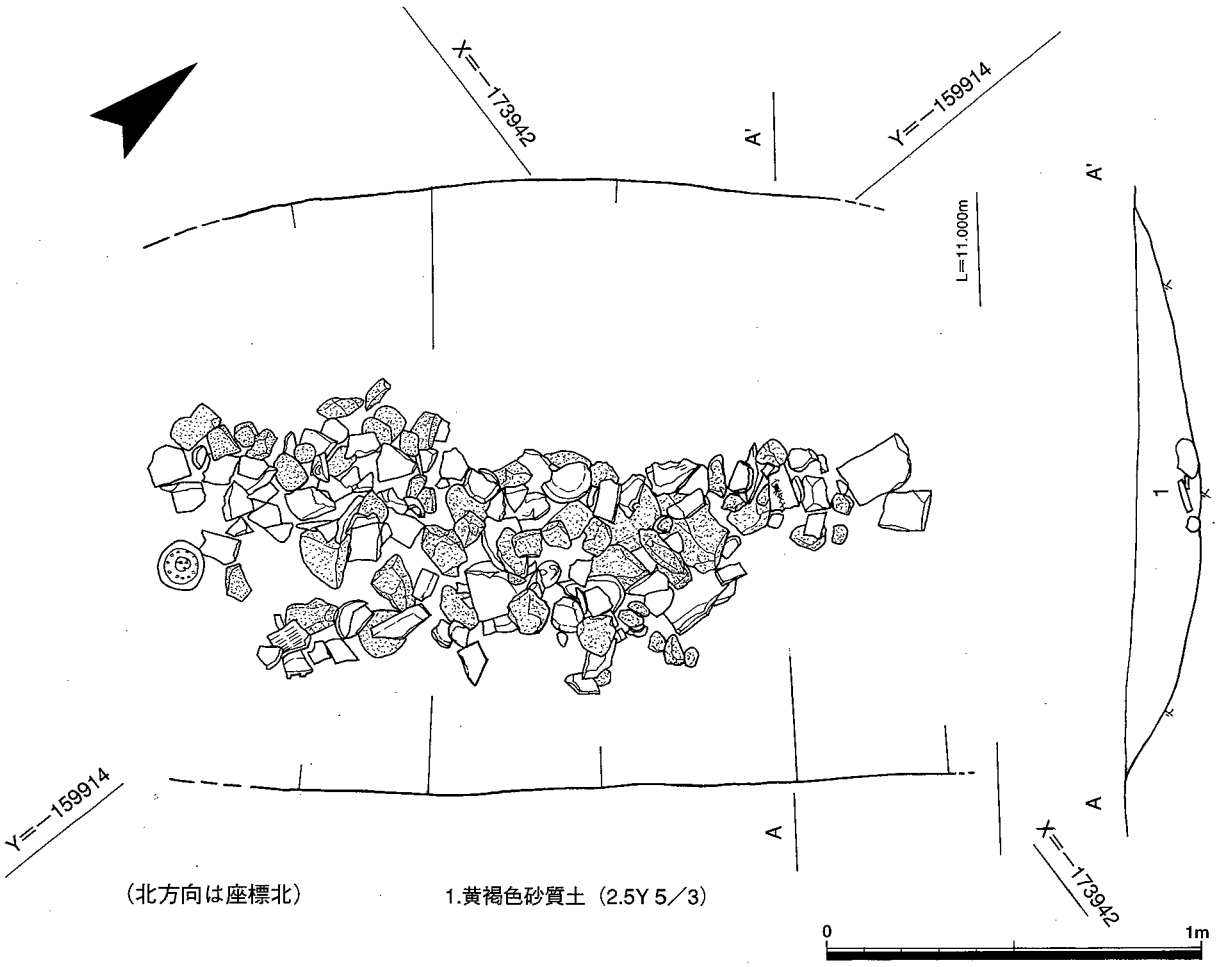


図４　ＳＤ－2001　集積部遺物出土状況図

あるが、地形改変によって削り取られた遺物包含層の遺物が溝の中に入った可能性もある。遺物の量は近世のものが多い。切合い関係や出土遺物の状況から近世に掘削されたと考えられる。1層は瓦、土師器、陶磁器が出土している。2層は瓦（写真31）、瓦器、土師器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器、焼塩壺（写真29）が出土している。焼塩壺はそろばん型と呼ばれるもので在地産である。また、この焼塩壺とセットと考えられる蓋（写真30）の破片も出土しており、「イツ□　ツ□　花焼□」銘の刻印がある。3層からは瓦器椀、青磁（写真28）、瓦（写真32、33）などの中世の遺物が出土している。

ＳＤ－２００５

本遺構はＡ－１区にて検出した溝である。SD－2004を切っている。溝の方向は北東－南西方向、粘土採掘土坑のSX－2007の埋め戻し後に掘削されている。検出長2.0m、幅1.0m、深さ0.2mである。埋土は１層で耕作土が埋土である。耕作に伴う溝として掘削された排水溝と考えられる。遺物は、瓦、瓦器、陶磁器が出土しており、中世のものを含んでいる。本溝の時期はSX－2007との切合い関係から、近世以降と考えられる。

ＳＸ－２００３

本遺構はＡ－5区にて検出した土坑である。直径1.8m、深さ0.25mの円形土坑である。埋土は3層に分けられ、1層から瓦が出土している。土坑は円形であり、枠が入れられていた可能性がある。土坑内は湧水がしていることから水溜として使用されていたと考えられる。本土坑の時期は出土遺物から近世と考えられる。

ＳＸ－２００７

本遺構はＡ－１区にて検出した粘土採掘土坑である。調査区外に遺構が広がるため全体の規模は確認できないが検出長3.6m、幅1.2m以上、深さ0.55mで埋土は黄色粘土ブロックを含む耕作土層である。遺物は陶磁器、瓦が出土しており、近世に掘削されたものと考えられる。

ＳＸ－２００８

Ａ－1区にて検出した土坑である。調査区外に遺構が広がるため全体の規模は確認できなかったが、検出長1m、深さ0.4mである。本遺構の埋土は２層に分けられる。1層は耕作土と黄色粘土ブロック混じり層、2層は瓦、陶磁器、瓦質土器、土師器などの遺物が詰まった状態であり、その状況から廃棄土坑と考えられる。遺構の時期は出土遺物から近世と考えられる。

第２区

本調査区は長さ約20m×幅３mの規模（60㎡）で設定した。調査区の地層の状況は盛土0.5m、耕作土0.1mでその下は黄色粘土の地山である。盛土、耕作土は現代のもので出土遺物はなかった。遺構は溝１条、鋤溝６、杭跡６、土坑５、柱穴２を検出した。以下、主な遺構の概要を示す。

ＳＤ－２００６

本遺構はＢ－5区にて検出した溝である。南東－北西方向に流れる。検出長2.3m、幅0.7m、深さ0.12mで埋土は２層に分けられる。地形改変によって遺構の上層部分はかなり削平を受けている。遺物は1層から瓦器椀が出土しており、2層から紀伊型土師質の土釜（写真14）、瓦器、土師器が出土している。本溝の時期は、出土遺物から14世紀～15世紀に位置付けられる。

ＳＸ－２００９

本遺構はＢ－５区にて検出した土坑である。長軸0.6m、短軸0.4m、深さ0.06mで埋土は暗灰黄色土である。遺物は土師器、瓦器が出土している。

出土瓦

今回の調査では瓦が多く出土しており、調査全体で出土した瓦は、遺物コンテナに約10箱である。出土した瓦のすべてが破片である。瓦が出土した遺構はＳＤ－2001、ＳＸ－2003、ＳＤ－2004、ＳＸ－2007、ＳＸ－2008と限られている。平安時代と考えられる平瓦は凸面に縄目の叩きが施されたものである。瓦出土の各遺構で数点ずつ見られる。瓦の整理に当たっては、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦で凸面に斜格子の叩きが施されているものを抽出

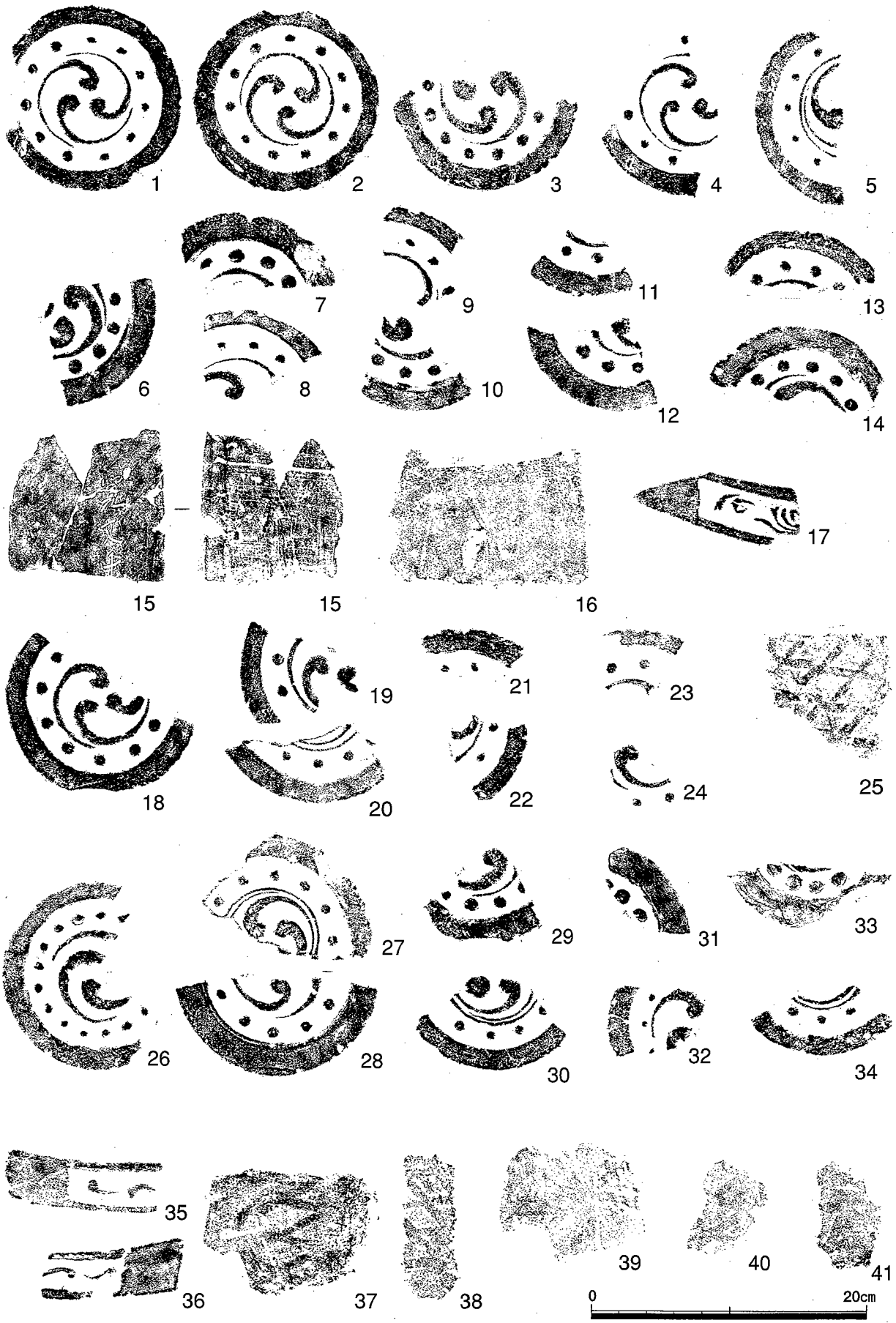


図5　SD-2001集積部(1～17)、2層(18～25)、3層(26～34.37)、SX-2007(38)、SX-2008(35.36.39～41)出土瓦

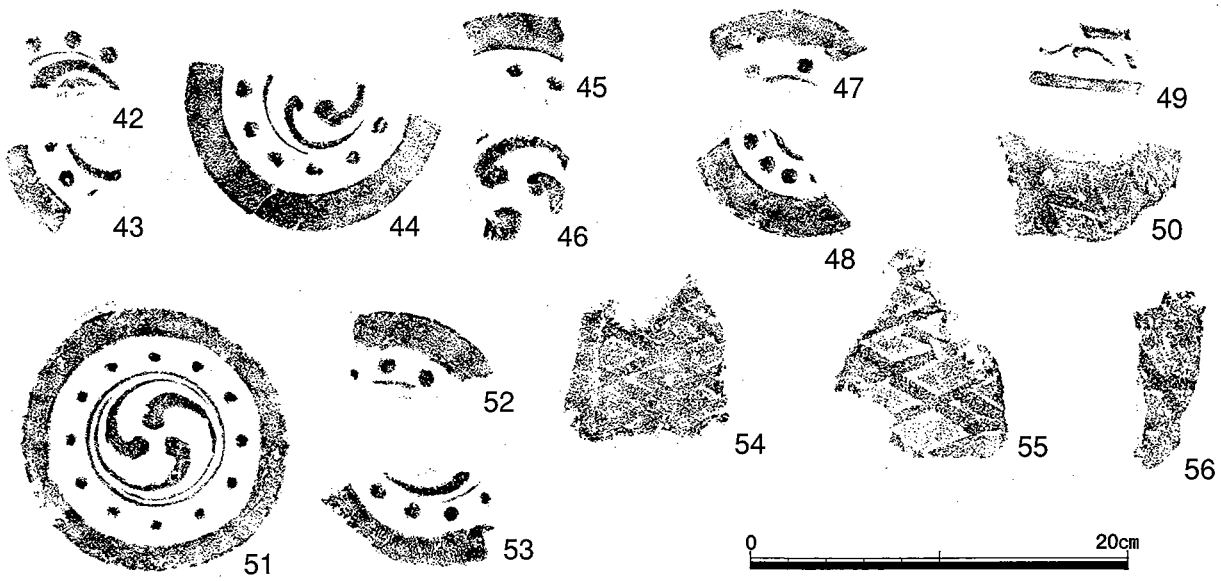


図６　SD－2004　１層(42、43)、２層(44～50)、３層(51～56) 出土瓦

した。この３種の瓦が出土している遺構はＳＤ－2001、ＳＤ－2004、ＳＸ－2007、ＳＸ－2008の４遺構のみである。また、今回の調査では寛文十□（1660～1663年）の銘文瓦（15）が出土した。以下、各遺構の出土瓦について概要を示す。

ＳＤ－2001（図５）

軒平瓦は集積部で出土した均整唐草文の1点（17）のみで近世に位置付けられる。斜格子の叩きの平瓦は鎌倉時代に位置付けられ、集積部（16）、2層（25）、3層（37）で各１点ずつ出土している。

軒丸瓦は集積部に多く見られ2層、3層から約30点出土している。瓦当の文様は三巴文のみである。巴の方向は左巻きのものと右巻きのものの２種類がある。また、巴文の尾の長さが長く半周以上するもの（5、20、27、30、34）と、３分の１程度の２種に分かれる。尾の長いものは古く位置付けられ室町時代のものと考えられる。短いものは近世に位置付けられる。

SD－2004（図６）

軒丸瓦の瓦当の文様は三巴文のみである。左巻きのものと右巻きのもの２種類がある。また、巴文の尾の長さが長く半周以上するもの（51、53）と、３分の１程度の２種に分かれる。斜格子叩きが施されている平瓦は4点（50、54～56）出土した。軒平瓦は2層から１点（49）出土している。瓦当の文様は均整唐草文と考えられ、近世のものと考えられる。

SX－2007（図５）

斜格子叩きが施されている平瓦1点（38）が出土した。

SX－2008

軒平瓦は2点（35、36）出土している。ともに均整唐草文と見られ、近世のものと考えられる。また、斜格子叩きが施されている平瓦３点（39～41）が出土した。

３．ま と め

調査の結果、耕作に伴う地形改変で削平されているものの、調査区全域で遺構を検出した。地形改変の際、土地は削平され、溝は埋め戻され、また別の場所に掘削されたりということが行われた。以下、時代順に本調査地をまとめることにする。

中世以前

中世以前の遺構は検出されていないが、SD－2001、SD－2004 から平安時代と考えられる瓦片が出土している。本遺跡に近接して平安時代の寺院跡（明楽寺跡）を推定しており、周辺部の調査においても平安時代の瓦が

出土しており、周辺に寺院があった可能性が指摘されている。中世の地形改変によって推定される寺院も削平をうけた可能性がある。しかし、瓦以外の遺物はほとんど出土していない。このことから、本調査地が耕作地として開発を受けたのは中世以降と考えるのが妥当ではないだろうか。

中世

中世の時期の遺構はSD－2002、SD－2006の溝２条を検出できたにすぎない。

SD－2002、ＳＤ－2006はともに14世紀～15世紀に掘削された溝である。本調査地は今回の検出遺構等から見て農地利用されていた地点であり、この2条の溝は耕作地のための農用水跡と考えられる。

出土遺物は瓦器椀を中心として13世紀後半～14世紀代のものが多く出土しており、本調査地周辺で集落が展開し、耕作地を拡大したと考えられる。耕作地の拡大は地形改変によって実施され、削平してその土で段差を平坦にする方法により、浅い遺構は消失してしまった。

本調査地においても、地形改変が行われており、本来地形変化地点で掘削されたと考えられる溝SD－2002は、地形改変によって埋められ、約２ｍ山側にできた新たな地形変化地点に溝SD－2001が掘削されている。また、ＳＤ－2006は本来、地形変化部分に掘削された溝に流れ込んでいたものであるが、地形改変により削平され、遺構の一部が消失している。

近世

近世の遺構は、溝（SD－2001、SD－2004、SD－2005）、土坑（SX－2003、 SX－2007、 SX－2008）、耕作に伴う土坑SX－2003、粘土採掘土坑SX－2007は、廃棄土坑SX－2008である。近世にも地形改変は実施されたようであり、SD－2001は上面が削平され、溝は埋められている。また、近世には粘土採掘が行われており、SX－2007のように土坑状に掘削を行う場合と平面的に広範囲に粘土採掘を行う場合がある。

出土遺物では、瓦が多く出土している。これらの瓦は寺院のものと考えられる。調査地に近接する寺院「宝蔵寺」は、元文３（1738）年に岸和田に移築された「十輪寺」の跡地に延享２（1745）年に沢村から移築された。移築時または増築等にともなって出た破損瓦を近接する本溝に廃棄したと考えるのが妥当といえる。SD－2001集積部出土の「寛文十□」（1670年～1673年）銘の瓦はその時に廃棄された可能性が高い。

宝蔵寺では1981年に建替え工事に伴う調査が実施さている。東西方向の幅約４ｍ、深さ0.3ｍの溝状遺構を検出している。この溝状遺構は沢城の堀の可能性があると推測されている。本調査検出の溝と方向がちがうものの出土遺物の状況が似ており、同一の溝の可能性もあると考えられる。また、調査地周辺の地字図をみると本調査区に隣接して山側に「内堀」という地字も確認できるが、溝の広がり、方向、規模などの条件を考えていくと本調査で検出した溝が堀である可能性は低く、耕作に伴なう溝と考えるのが妥当と考える。

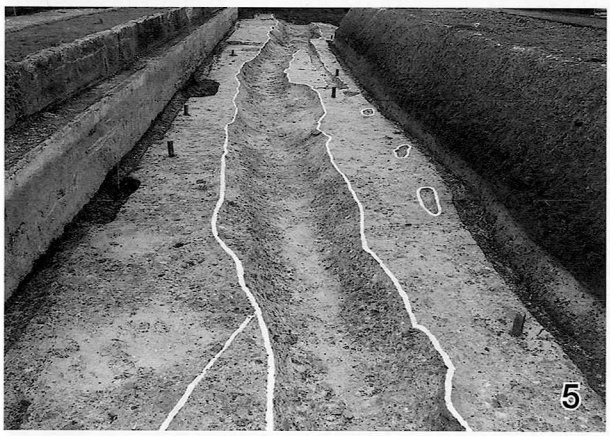
今回の調査では、検出遺構から中世～近世の地形改変を見ることによって耕作地の変遷を追うことができた。出土遺物では、多数出土した瓦には平安時代の瓦もふくまれていることがわかった。また、近世の出土瓦からは「寛文十□」（1670年～1673年）銘の線刻瓦が出土し、当時の周辺の状況を考える成果を得た。

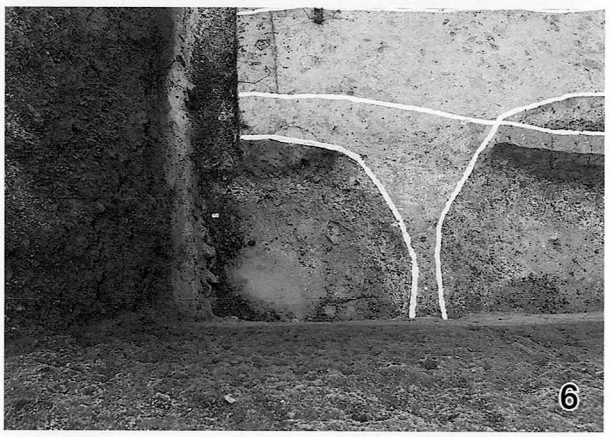
参考文献

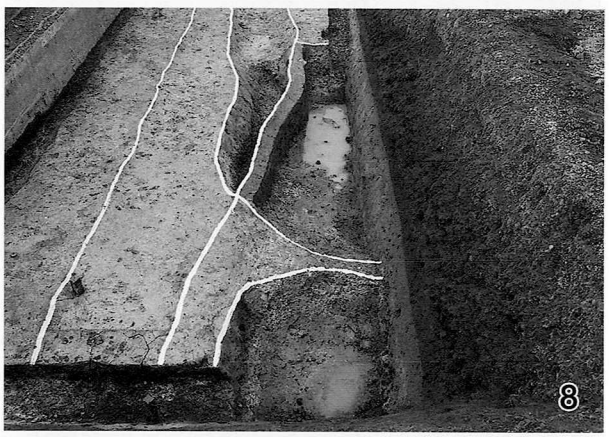
貝塚市教育委員会1982『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅳ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第５集
貝塚市教育委員会1986『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅷ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第11集
貝塚市教育委員会1987『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅸ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第14集
貝塚市教育委員会1988『貝塚市遺跡群発掘調査概要Ⅹ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第16集
貝塚市教育委員会1992『貝塚市遺跡群発掘調査概要XⅣ』貝塚市埋蔵文化財調査報告第24集
貝塚市教育委員会1996『貝塚市遺跡群発掘調査概要18』貝塚市埋蔵文化財調査報告第38集
貝塚市教育委員会1997『沢新開遺跡発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第41集
貝塚市教育委員会1999『沢城跡群発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第51集
元興寺文化財研究所1982『中・近世瓦の研究－元興寺篇－』1982年度　日本自転車振興会補助金による

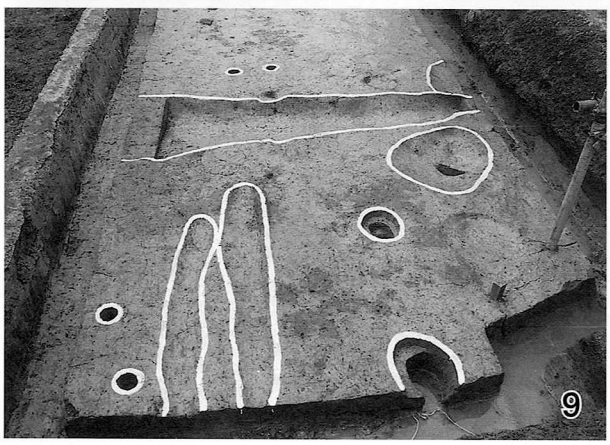
写真１　調査区全景

写真２　SD-2001、SD-2002









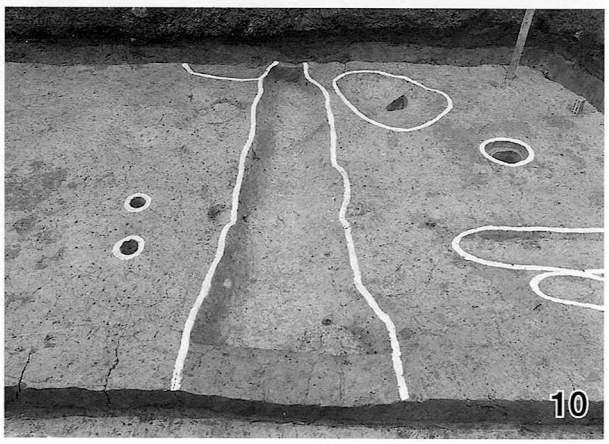


写真3　SD-2001集積部 東より、4　SD-2001集積部 南より、5　SD-2004 北東より、6　SX-2008 南より
7 SX-2007 南より、8 SX-2007 北東より、9 SD-2006、SX-2009 南東より、10 SD-2006、SX-2009 北西より

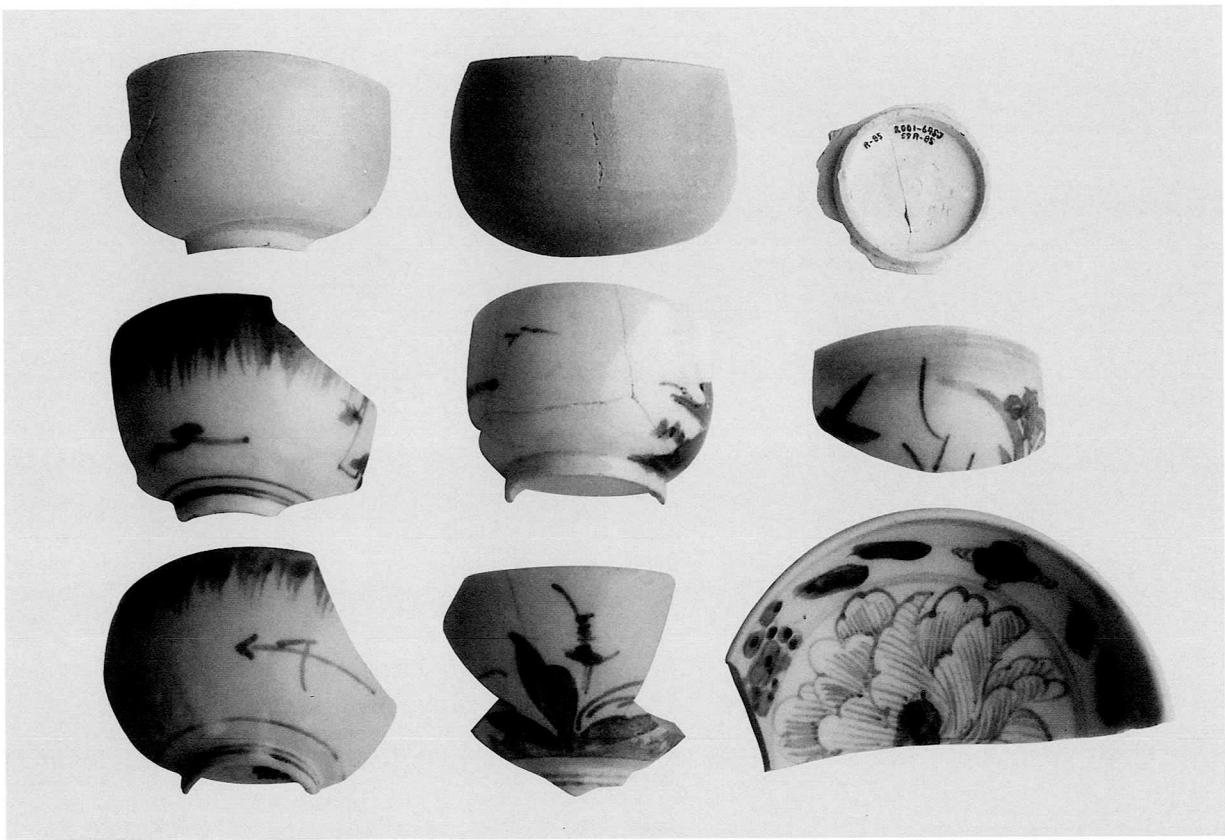
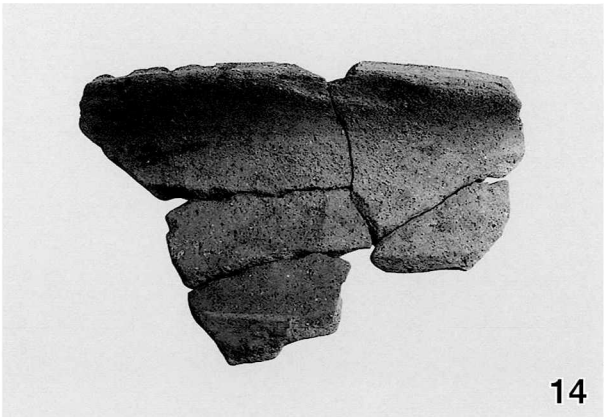
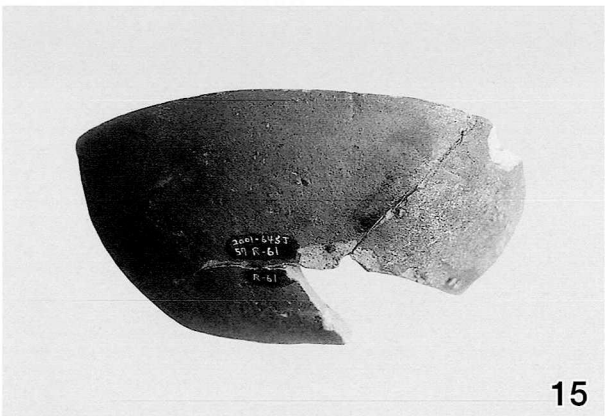
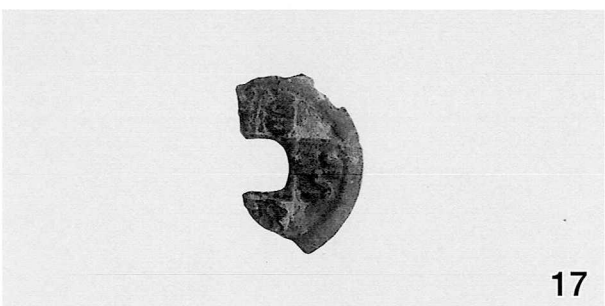


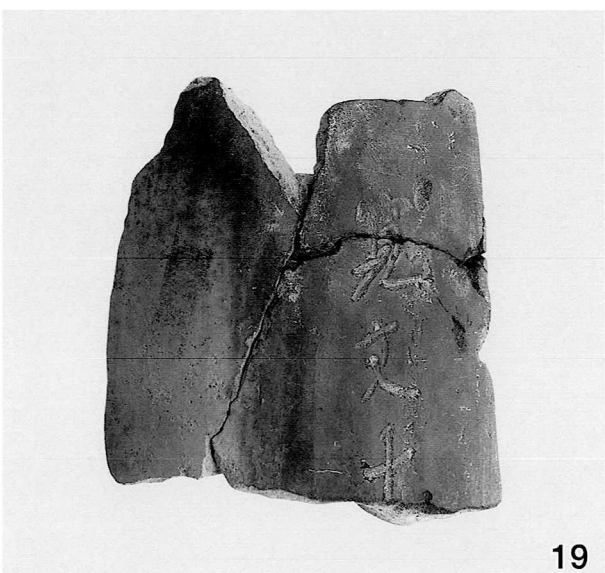
写真11　SD-2001　3層出土土器

写真12　SD-2001　集積部　出土軒丸瓦









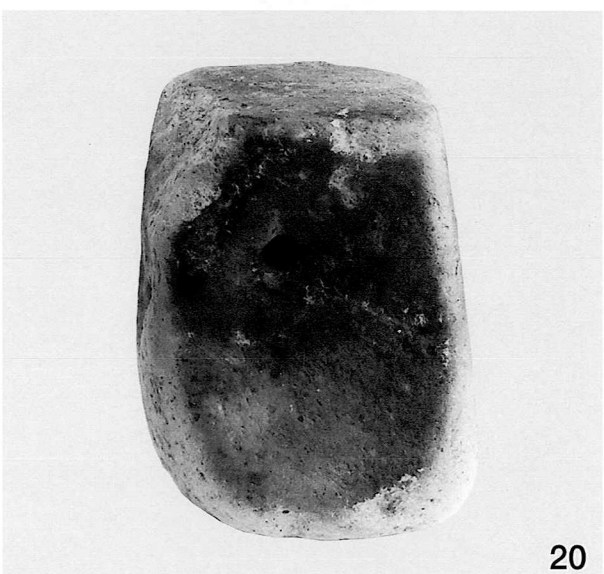
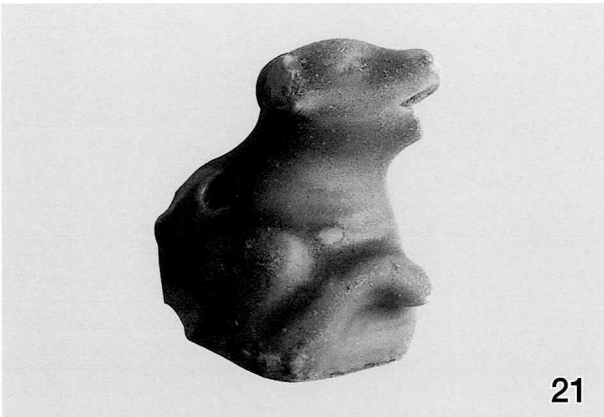
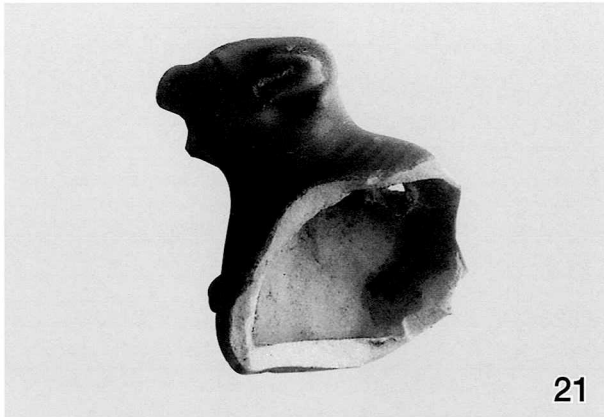
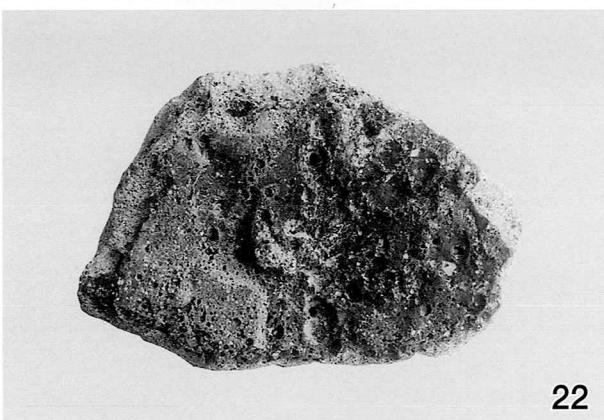
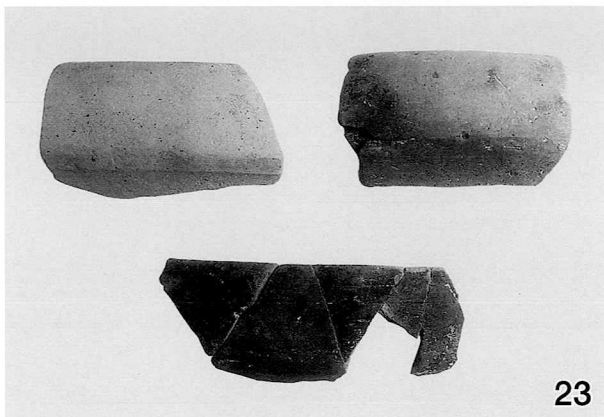


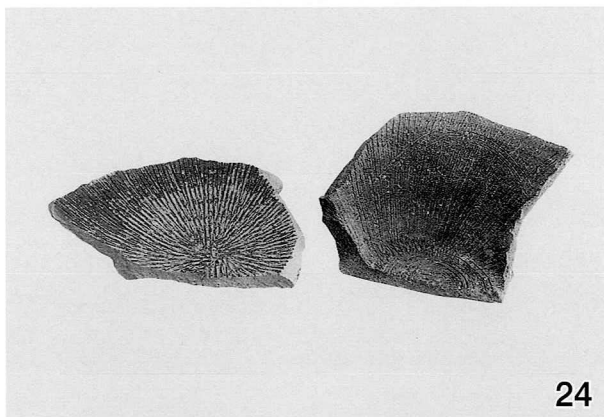
写真13　SD-2002　2層出土土器、14　SD-2006　2層出土土器、15～18　SD-2002　3層出土遺物
19、20　SD-2001　集積部出土遺物

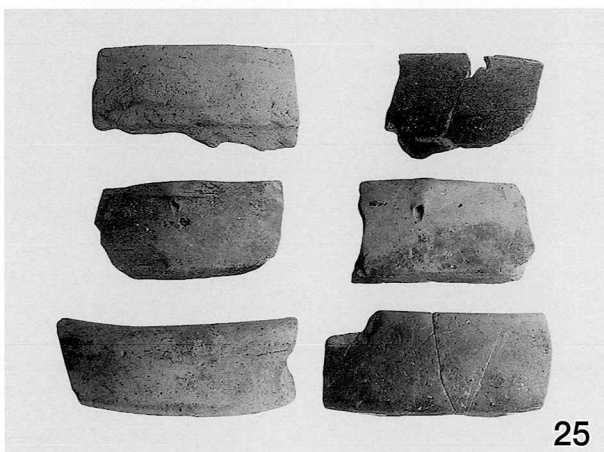












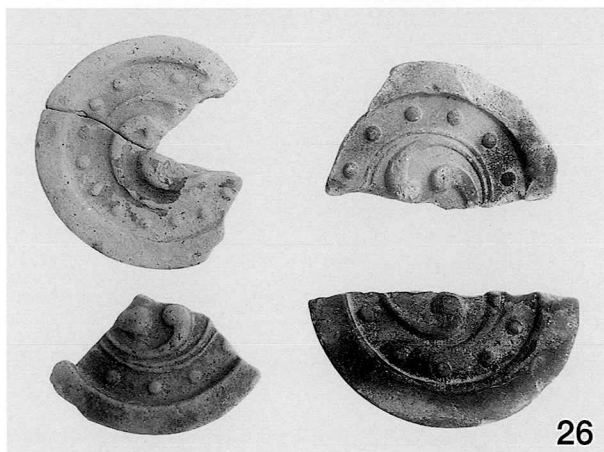
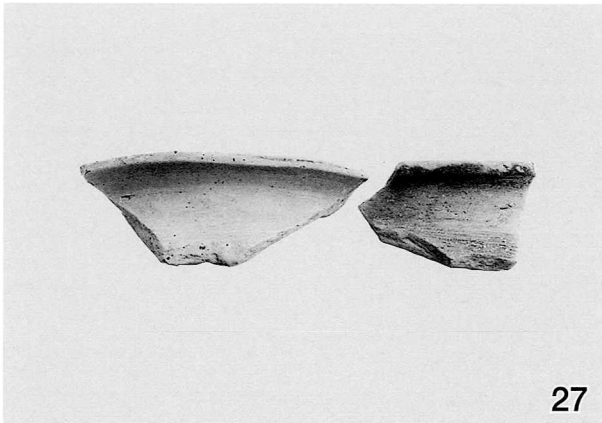
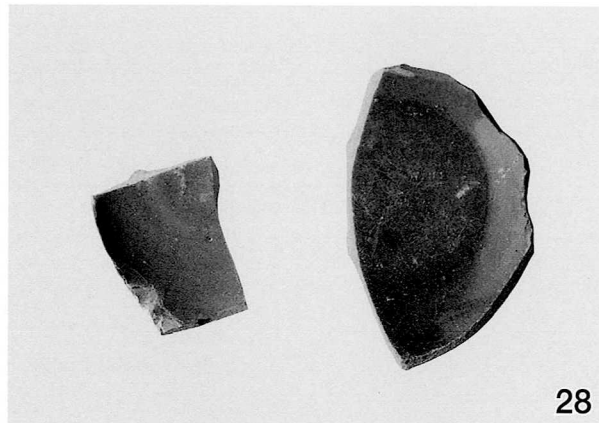
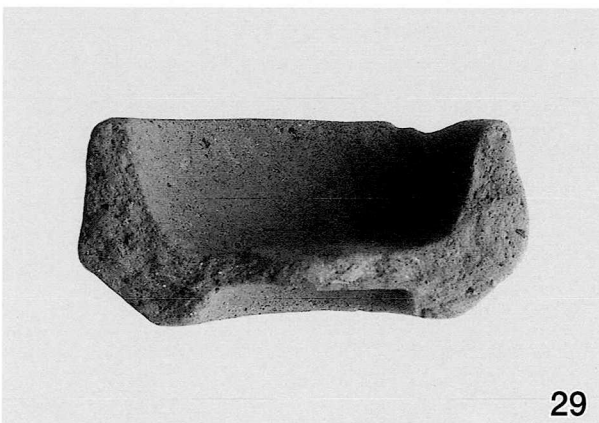
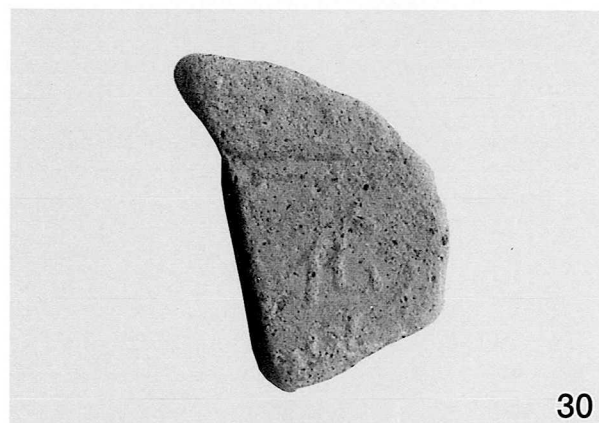


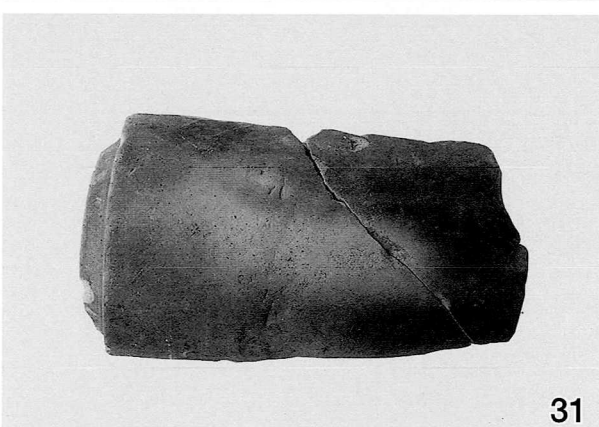
写真21～23　SD-2001　2層出土遺物、24～26　SD-2001　3層出土遺物

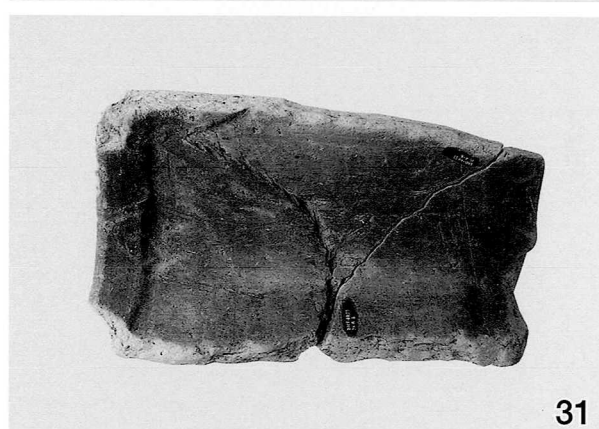












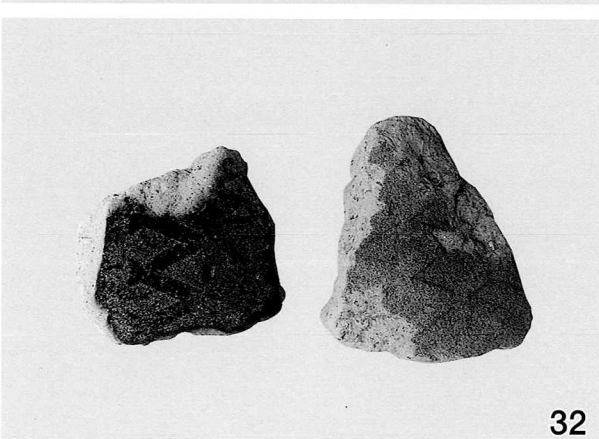


写真27　SD-2004　1層出土土器、29.30.31　SD-2004　2層出土遺物、28.32.33　SD-2004　3層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さわじょうあとはっくつちょうさがいよう
書　　名	沢城跡発掘調査概要
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第63集
編著者名	三浦　基
編集機関	貝塚市教育委員会
所 在 地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号
発行年月日	西暦2002年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
さわじょうあと 沢城跡	おおさかふかいづかしうらた 大阪府貝塚市浦田	27208	28	34 度 30 分	135 度 20 分	2002 年 3 月 4 日～ 2002 年 3 月 2 8 日	2 7 2	共同住宅 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特記事項
さわじょうあと 沢城跡	城跡 集落跡	中世	溝 土坑 鋤溝	土師器 須恵器 瓦器 土師質土器 陶磁器 瓦	

貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第63集

沢城跡発掘調査概要

発　行　日　　平成14年(2002) 6 月30日

編集・発行　　貝塚市教育委員会

大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号

印　　刷　　摂河泉文庫（貝塚市北町20－18）